

生活観をともなった勤労観を育成するために教師が勉強すべきこと

浦上昌則

(南山大学人文学部)

次のような教師はどの程度いるのだろうか。また、それを子どもたちに伝えることができる教師は、どの程度いるのだろうか。

- ・新聞の経済欄を読む教師
- ・毎年、労働白書に目を通している教師
- ・日本版401kについて知っている教師
- ・両親の部屋は無いが子ども部屋はある、といった家が多いことを解釈できる教師
- ・介護保険制度を理解している教師
- ・日経平均という言葉の意味を知っている教師
- ・IT, eコマースとは何かを知っている教師
- ・10年先の社会についてのビジョンを持っている教師
- ・選挙時には必ず投票に行く教師
- ・持ち家と借家のメリット, デメリットを説明できる教師。
- ・フリーターのメリット, デメリットを説明できる教師。
- ・今後、衰退が予想される業種・職種を解説できる教師
- ・ドル建てMMFのメリット, デメリットを説明できる教師
- ・年金は積み立て貯金とは違うということを説明できる教師
- ・教師以外の仕事を知っている教師 ...など

子どもたちがこのような教師から学べるであろうことは、かれらがこれから生きていくうえで非常に得るところが多いと考えられる。しかし、在学中の私に、このようなことを伝えてくれた教師はほとんどいなかった。

日常の生活を営むうえで、多かれ少なかれ、ほとんどの生活者はこのような問題について考えざるを得ない状況に陥るといえよう。そこで学び、理解しようと務め、さらに自分なりの結論が導けた経験がある教師には、これらについて語ることはそれほど難しいものではないと考えられる。しかし、ニュースに知らない言葉が出てきても調べようとしないとか、家計のやりくりは自分以外の誰かに任せてしまっている場合には、学校での空き時間にちょっと語ろうとしても不可能ではないだろうか。

健全な勤労観は、現実的な生活観(感)から乖離したものであってはならないと考える。しかし現実的な生活観を伝えるには、従来の学校教育にはなかったような、ある種の生々しさを持った教材が必要となる。また教師自身の生活知、生活力のようなものも厳しく問われることになるだろう。このように考えると、教師が勉強すべきことの輪郭が、自然と浮かび上がってくる。その一つは、将来に目を向ける一生活者として必要な知識・知恵を、教師という職に就いていない人以上に蓄えることである。もう一つは、それを、過度の生活(人生)不安を抱かせないように、子どもに伝える方法を吟味することである。もしこのような指導が行われたならば、本格的な進学・就職先の選択に際して問題となる、現実的な生活観が持ていかなかったり、職業観が現実に対する生活観から乖離したりすることが減少するのではないだろうか。